連載 博聞意伝 世代を超えて未来を語る

第25回

伊藤 満洲雄

（ブルーベル・インフォメーション社長）

〔聞き手〕澁澤 健

（コモンズ投信会長）

満洲国建国とともに始まった人生

澁澤 対談「博聞意伝」は今回で第二十五回を数えます。この記念すべき節目に伊藤満洲雄さんにご登場いただきました。毎回対談のはじめに申し上げていることですが、この企画は『ほほづゑ』同人の先輩、あるいは人生の先達から、その来し方や、ご自身の知見を

通して、そのお感慨を次代へのメッセージとして発信していただこうというものです。伊藤さんが『ほほづゑ』の同人になられたのは二〇一一年（平成二十三年）、第六十七号からですが、『ほほづゑ』に入られる以前から文章を書かれていたということでしたか。

伊藤 いえ、文章を書くようになったのは『ほほづゑ』の同人に加わってからです。……それで、こういう場でお話しをする機会をいただきましたので、私なりに自分の来し方を振り返ってみました。幼少の頃のことからお話ししますが、殊に、私が三十一歳の時、住友軽金属社員として、一九六三年（昭和三十八年）から翌年に掛けて、ジュネーブのインターナショナル・マネージメント・インスティチュート（IMI、現在のIMD）で学ぶ機会がありました。当時十四ヶ国から二十九人の人達が集まって来て学んでいました。とても優秀な若い経済人が集まって来ていました。その中で敗戦国から来ていたのは日本とドイツからで、ドイツ人が二人、日本人が私を含めて四人でした。その内訳は、住友軽金属の私と、日軽金から二人、そして東洋アルミから一人という構成でした。

澁澤 東アジアからは日本だけですか。

伊藤 日本だけです。それで、日本人は極めてインターナショナルで算術に優れているということを自覚したのはまさにこの折のことでした。私は東大法学部の出ですが、日本人であれば誰もが中学や高校で、$\sqrt{2}$（ルート2）は、1．4142125 6…、$\sqrt{3}$（ルート3）は、1．7320508075…、$\sqrt{5}$（ルート5）は、2．2360679…という平方根などを暗誦していたものです。そして私は算盤（そろばん）をやっていましたので、算術には自信がありましたし、歴史（世界史）にしても、古代ギリシャ、ローマから現代史に至るまで、おおよそのことは諳（そら）んじていましたから、（IMIで一緒に学んだ）他国の人たちから驚かれ、尊敬されました。（笑）

澁澤　非鉄金属系の若手企業マンへのゼミナールだったようですね。何かエピソードはありますか。

伊藤　インドから来た人とか、ジャマイカから来た人とか。ＩＭＩで一緒に学んだジャマイカ人は、アフリカ系のジャマイカ人と中国系のジャマイカ人でしたが、二人とも大変優秀でしたよ。ジャマイカの話を始めると大変面白く、対談の主旨から反れてしまうので、母親がジャマイカ系であるというハリー・ベラフォンテの「カムバック・ライザ」という今でも諳んじて唄える名曲があることを紹介するに留めましょう。（♪）

澁澤　唄がお上手ですね。……ＩＭＩのような国際的な研修の場では、共通語として英語を使われたのでしょうが、英語は何時、どのように学ばれたのですか。

伊藤　英語は、疎開先の滋賀県立膳所中学校、そして終戦後に転校した都立一中（後の日比谷高校）で学びました。もっとも、英語学習については吉田健一さんから徹底的に教わりました。これについては後にお話ししますが、その前に中学に上がるまでの経緯をお話しなければなりません。

私の生い立ちを申し上げると、私は昭和七年三月三十日に兵庫県川辺郡塚口で生まれました。父は伊藤博文の次男・眞一（一八九〇―一九八〇）で、当時南満洲鉄道に勤めており、私が生まれる前年に大阪に転勤になっていました。私の名前は、満洲国の建国（昭和七年、三月一日）にちなんで満洲雄と名付けられました。私の四つ年上の兄は大連生まれです。私が生まれた塚口というところは大都市・大阪の近郊にあたり、当時インテリ層の多くは大阪の学校に通学しており、兄が大阪の曽根崎小学校に通っていたので、私も曽根崎小学校に通いましたが、その後、塚口小学校、父の転勤に伴って東京の青南小学校、そして戦時疎開で滋賀県の瀬田国民学校に移りました。しかし、私は子供の頃から身体が弱く、曽根崎小学校に入学した年の秋に肺炎になり阪大付属病院に入院しました。そして、

良くなって退院したかと思ったら、今度は中耳炎というように、両親は「この子はとても育たないのではないか」と思っていたようです。ところがこの歳（八十六歳）まで元気でいられたのですから、「勉強もよく出来る優しい子だけれど、早く亡くなってしまうのではなかろうか」と度々口にした両親に対しては〝親孝行をした〟ということだったのかも知れませんね。

澁澤　そうですか。成績が良かったんですね。

伊藤　成績は良かったです。そして英語の学習の話ですが、中学校で習うとともに吉田茂さんのご子息・吉田健一さんから英語を教わりました。健一さんは後に英文学者として活躍されますが、終戦の年の五月に海軍主計兵として召集され、敗戦後復員された足で東京の神山町の家をたずねて来られました。訪ねて来られたというよりも、以前健一さんたちが住んでおられた所に、私たちが住んでいたということです。神山町に満洲国大使館がありましたが、その隣の家でした。

澁澤　満洲国大使館が神山町にあったのですか。

伊藤　ありました。……「ごめんあそばせ」と言って、リュックサックを背負った、汚れた海軍軍装の人が玄関に立っていました。たまたま玄関の近くにいた私が応対に出ましたが事情がのみ込めず、母に取り次いだところ、「健一さん！　……吉田茂さんのご長男ですよ！」ということで招じ入れ、よもやま昔話に及びました。私が滋賀の膳所中学から、終戦とともに都立一中に転校して来てまだ十日も経たない頃です。

都立一中の授業の程度はさすがに高く、毎週の試験で零点が重なったことに母が心配して、健一さんに教えを受けることになりました。英語が中心でしたが、「何を教わりたい？」との健一さんの問いに、「魚のことを教えて下さい」と私は頼みました。滋賀の瀬田に疎開した折、琵琶湖で投網漁をする人の家に寄宿していた私は、魚のことを学問的に詳しく知りたいと思っていました。それで、健一さんは何処からか英語版の

分厚い魚の学門書を手に入れて来て、一年間掛けて私に教えて下さいました。魚のことを教わりながら同時に英語教育を受けたという次第でした。

澁澤　吉田健一さんといえば英文学としても、文芸評論家としても著名な方ですが、お人柄はどういう方だったのですか。

伊藤　先ほどお話したように、「ごめんあそばせ……」などという女性言葉のような丁寧な言葉を使う人でしたが、実に〝男っぽい〟お人でしたよ。

澁澤　吉田さんとのお歳の差はどの位あったのですか。

伊藤　吉田健一さんが大正十一年（一九二二年）のお生まれで、私が昭和七年（一九三二年）生まれですから十年の歳の差です。吉田さんはケンブリッジ大学のキングス・カレッジに通ったほどの秀才でした。

澁澤　吉田健一さんに初めて会われたのは終戦の年（一九四五）で伊藤さんが十三歳の時でしたね。伊藤さんのお父上はどのような方だったのですか。

伊藤　私の父は、第一次大戦後のパリ講和会議（一九一九年一月～七月）の折、西園寺公望全権代表のもとで交渉にあたった牧野伸顕（大久保利通の次男）さんの随行員として一行に加わっています。二十九歳の時です。当時は延々と船便で一ヵ月掛けて現地に赴いています。父自身は格別に学識があった訳ではありませんが、父親が維新の元勲・伊藤博文であったということもあってか、随行員として一緒に行動出来たお陰で、後に政府の要職に就いた人たちと親しくなり、随分顔が広かったようです。学歴としては、〝伊藤博文の息子〟ということで、方々から引きがあったものの、一高の受験に二度失敗して、二高（仙台）に行ったのですが、〝自分は勉強は出来ない〟と思い込んでしまっているので、あまり勉強をしなかったようです。それでも東大に合格しており、〝伊藤が東大に入ったぞ〟と言って、二高の学友が驚いたり、がっかりしたりしていたそうです（笑）。……自分でそう言っていました（笑）。

澁澤　勉強しないで東大に入れるならば、がり勉する必要はなかったのでしょうね。

語学の学習から語学研修推進の業務へ

澁澤　先ほど伺った、伊藤さんのＩＭＩでの学習が一九六三年で、今年が二〇一八年ですから、五十五年前のお話ということは、それほど昔のことではありませんね。

伊藤　まだ生々（なま）しいですよ。一九六三年、東京オリンピックの前の年ですが、スイスのジュネーブに飛行機で向かいました。飛行機に乗るのは初めてでした。

澁澤　中学校で英語を学ばれ、吉田健一さんから英語の個人レッスンを受けられたのですが、外国人に向かって初めて英語を話された時のこと、相手の反応とか覚えておられますか。

伊藤　私の英語はペラペラで通じていました。何の問題もありませんでしたよ。

澁澤　初めての英会話が何の問題もなく通じたというのはすごいですね。

伊藤　行きの飛行機で、フィリピン人の十八歳の高校生の男の子と一緒になりました。外交官の息子で普段はロンドンに住んでいるのだが、休暇で旅をしていてフィリピンに帰るのだと言っていました。その子と話をしたのが、外国人との初めての英会話でしたね。……むしろ私の方が流暢な英語でしたよ。そして彼がマニラで降りた後、同じ飛行機に乗っていた、三、四歳位の女の子を連れたご婦人とお話しする機会がありました。先方から話しかけて来られたのですが、〝どちらに行かれるのか〟と言うので、〝初めてジュネーブに行きます〟と言うと、〝それならジュネーブのことをいろいろ教えてあげます〟ということで会話が始まりました。〝ジュネーブ空港から市街地までバスの便が良く、経済的なので利用するといい〟というアド

バイスも貰いました。当時は外貨持ち出し制限があり、一ドル＝三百六十円の時代でしたから、このアドバイスは助かりました。さらに〝乗ったバスの運転手に宿泊するホテルの名を告げると、そのホテルの前で止めてくれますよ〟ということも教えてくれました。

澁澤　業務上の出向（しゅっこう）とはいえ、いい旅だったようですね。その後は方々に出向（でむ）かれましたか。

伊藤　一九七六年だったか、サウジアラビアの東部州にある、アルジュベールというペルシャ湾に面した町に赴きました。ここは大きい石油精製、石油化学に関する工場が林立する重要拠点で、サウジアラビアがメジャー（国際石油資本）から離れて独自のプラントとして開発した最初の工業プラントです。私は住友軽金属工業で、非鉄金属の仕事をしていましたので、石油精製、火力発電、船のタービンの三つを会社で勉強していました。

一九八〇年代に入ると、世界中のどこでアルミニウムの原料のボーキサイトが埋蔵されているか。アルミニウムはどの国でどの位生産されているか。そのコスト競争力はどうか。……私が会社に在籍していた後半は、アルミニウム連盟のメンバーとして、会社のためというよりも、日本のアルミニウム精錬業のために時間の大半を費やしました。この当時の不況産業は、アルミニウム精錬業、造船、繊維、工作機械でしたが、アルミニウム精錬は殆んど日本から姿を消してしまいました。そして一九八二年（昭和五十七年）に住友軽金属アルミニウムは解散しました。

澁澤　現在伊藤さんが社長をされている、ブルーベル・インフォメーションはやはり語学研修に関するお仕事が中心なんですね。

伊藤　ブルーベル・インフォメーションは一九九〇年（平成二年）に設立しました。主な業務は、大企業の社内語学教育にネイティブの教師を派遣する事業と、翻訳・調査を行って来ました。

伊藤満洲雄氏　　澁澤　健氏

澁澤　最後に、この対談の恒例であります、次代、若者へのメッセージをお願いいたします。

伊藤　どの時代でもそうなのでしょうが、常に若い人の方が我々年寄りよりも優れていますし、若くて賢い人が多くいます。大いに頑張っていただきたいですね。

澁澤　ありがとうございました。

（いとう　ますお／しぶさわ　けん）

〔二〇一八年七月三日収録〕

＊　　＊　　＊